

ぼくらの半分の時間「人生」を 歩んで来た現役諸君へ

昭和五十年入学 稲賀繁美

独身貴族とは名ばかりで、坂口安吾の書斎そのままの反故の山に埋もれて原稿用紙を埋めている。足掛け八年にわたるフランス滞在という空白はあったが、帰国後はできるかぎり合宿にも参加して、とにかく現役諸君の顔だけは記憶するように努めてきた。

だがそれも今年は無事ななかった。内外それぞれに理由がある。

ソトの方から申し上げる。六月には『薔薇の名』のウンベルト・エーコなどと一緒に中国西域から北京、マカオと講演旅行。八月にはカナダとブラジルの学会に参加。「ガイジン」たちの体力に対抗するにはひたすら増量あるのみ、と覚悟して飽食した結果、秋からの稽古すら思いやられる体格、体調になってしまった。はじめて受けてみた人間ドックでもCがいくつか。これも年齢というものだろう。だがそれくらいは犠牲は覚悟でも、機会があれば身銭を切っても外国に出て行って、自己の責任と能力の許す限りで誠意を示すことが、今日日本の大学教師として、最低限の責

務だと感じる。立身出世の世俗的利害には逆行して、また日本の国内事情を口実に言を左右するという退路もみずから絶って、ひとりの人間として腹うちわって話せる外国の友人をつくる努力を惜しんではならないと思う。

と同時に国内事情も変化した。いままでは気のおけない仲間のつもりだった大学生たちが、もはや潜在的な結婚相手より遠のき、別世界の住人へと変貌してしまふ年齢に、いまやわれら共通一次直前の世代も達したようである。本来ならば合宿に参加して、そこで直に現役の諸君と腹藏なく語り合いたいことも多い。だが身ひとつではそれが果たせぬとあらば、『赤門』の紙面をお貸しいただくのも便法だろう。未熟者なりに、いまの自分の年齢に正直に書いてみる。

奉職させていただいている三重大学では「比較文化」という得体的にしない一般教育科目をいまのところ担当している（日本のマスコミがほとんどまともには報道してくれない、一般教育解体をめぐる改革については、今筆をはしよる。駒場の英語改革の迅速さを羨み、その成功を祈り、先生がたのご尽力を尊く思い、現役諸君がその利点を十二分に汲んでくれることを希望する）。当方の授業など、とても駒場では通用しない与太に過ぎないだろうが、幸い(?)毎年四百名近い、不幸にして騙された受講希望者を集め、果たせぬ責任の重圧に苦しんでいるのもぜいたくな話である。ことの善し悪しはともかく、一部の学生諸君からのまっ

うな批判を蒙りつつも、異彩だけは放っている——などと自己評価したのではあまりにも身勝手な自画自賛だろう。ご参考までに自分なりの工夫を開陳したい。

眼目とするところは(1)教科書検定と受験体制でガチガチになつてしまった学生諸君の、日本でしか通用しない常識をとにかくいったん徹底的に壊し、(2)書物やマスコミの受け売りではなく、現実の社会に接しての具体的な体験から、自分なりの発見をする感性を回復してもらい、(3)その発見の驚きを出発点に、自分で考え自分で調べをさらに進めながら、自分なりに意見をまとめて伝達する訓練を積むとともに(4)友人たちの批判に晒され、その批評に耳を貸すことでさらに自分を練る態度を身につけてもらう機会を提供するにある。この作業を日常に根付かせるなかで(5)自分個人の限界に気づいてもらい、その限界を越えるために、共通の課題に立ち向かうリサーチ・グループを随時目的に応じて造りあげ、協同と手分け、相互協力によって運営してゆく経験と訓練を積んでもらい、(6)単なる単位取得にとどまらぬ能動的な作業経験をもってもらおうと思っている。おおげさにいえば、大学に入って何かをみんなで作らあげたぞ、という実感をもってもらいたいわけだ。

いずれも、今日の高校までの学習であまりにも抑圧されてしまっている部分をなんとか回復させたい、と念じて工夫してみた思行錯誤4年目の現状だが、もとより教育学者でもない素人の暗

中模索にすぎない。手作りながら、それでもとにかく学生諸君に願うのは以下のようなことである。(1)出来合いの正解を、理由を問い返すこともなく盲目的にマニュアルよろしく身につけること。技術とは違う、もはや正解のない次元が大学の知の営みであること。(2)自分たちは出来合いの社会的受動的な利用者にはとどまらず、自分たちの調査探求が直接社会に働きかける能産的な能力ある営みたりうることを自覚すること。(3)また、とかく個人の能力判別の数量化ばかりを重視する試験制度ゆえに軽視されがちな協同作業というものの難しさと結果の大きさを、人生経験として自覚してもらうこと。

協同リサーチの負担の重さに半数の学生は途中脱落するが、受講者四百人を越す年もあるなか、夏休み以前に最低三通は報告を課して、いちいち添削と助言を加えて返却するというのは、決して楽な作業ではない。それどころか、受験の荒波を越えて来たわけでもないナイーブな学生などは、教師のちょっとした諫言を真に受けて自殺未遂やら退学までやらかすから、いかにひどいレポートでも、うっかり貶すのは危険きわまりない。脱落者の世話こそが肝要なのだ。

だから福袋いっぱいレポート読みが徹夜の真剣勝負になる。訴えない訳知り顔の優等生的答弁や、単位取得だけを目的とした準備ゼロの無責任な感想文には鉄槌を加え、将来小中高の先生になるはずなのにまったく社会の仕組みの分かっていない幼稚で

教条的なご託宣や、どこかの政党の宣伝する民主主義を盲信する（これもそろそろ使用禁止用語ですかね）御用作文には警笛を鳴らす。その一方で大学に入って初めて社会の矛盾に接して迷い悩む学生の心情吐露には、カウンセラーの代役まで買ってやるはめになる。もとより聡明なる業績中心主義者からみれば狂気の沙汰の対応なのだが。

こうした矛盾の結節点が外国語教育だ。儀式として単位をそろえれば卒業できる日本の大学と、競争原理で生き残らないと将来のないアメリカ合衆国の大学院予備校としての大学の比較をひととおり述べたあとで、それでは日本の大学を「国際化」するにはどうすればよいか、と尋ねると、答え（最良の！）はこうなる。自己主張のできる「アメリカ人」（ラテン・アメリカのことはお忘れだが仕方ない）は尊敬するが、日本の社会は自己主張が強いと渡っていけないのだから、外国（アメリカ合衆国のことらしい）の理想を日本に押し付けて日本は遅れていると主張するのはオカシイ。英語はしゃべれるようになりたいが（外国語というところ英語しか存在しないらしい）、和をもって貴しとする管理社会日本（これがいわゆる外国人労働者によって支えられているのはお忘れらしい）に訴訟社会アメリカの英語の原理を植え付けようとする「国際化」は無理だと思う。

ここまでくる学生がすでに少数なのだが、この答えは不正確なだけでなくズルい。ただし一生のあいだに英語を使う機会など何

度とない三重の学生にそれ以上は要求したくない。ここからの返答はむしろ外国人と付き合っていくことが社会的な責務となるであろう、しかしまだその自覚をほとんど持っていない日本の特殊な（しかしエリート養成学校としてはあまりに粗末な）大学の学生に向けられることになる。灯台性（としかワープロは出してくれない）、君たちはそれだけの社会的責任を、この大学に入学した以上、背負っている。モトクラシは困る。個人のスタンド・プレイとか、美容と強壮のためとか、装身具とかといった次元とは別に、君たちは最低英語で世界の表（や裏の）看板たちと渡り合っている。なにも国籍になれ、合衆国議会のロビイストになれ、というのではない。コメ自由化に断固反対する農家の人たちの立場を、自分ではおかしいと思っても異国の友人に理解させ、原爆の被害国が復讐の意図からではなく人類として犠牲者への償いのために戦争を放棄しようとして理想的な宣言に至ったことを伝達し、干渉に苦しむ地域に井戸を掘ろうとする無償の援助が現地で社会問題を起こすことを理解し、ODAの矛盾とNGOの苦悩とおのが体験として語れる人間であって欲しい。

外国にでてみると、日本には良い意味でのエリートがない、と気付く。香港、マカオ、北京、ウルムチの現実をみぬ経済評論家をぼくは信じない。国外で通用するだけの個人としての意見と思想をもち、なおかつ上からではない現場の視点から発想・発言

のできる人が必要なだけ養成されていない。底辺の見えぬ人はエリートではない。これは稽古の提要でもある。合気道部員の奮起に期待したい。